

保育者は経験年数を重ねることによってどのように変化するのか — 身体表現の指導・援助に関する悩みに着目して —

田 辺 昌 吾・松 山 由美子・古 市 久 子
遠 藤 晶・江 原 千 恵・内 藤 真 希

保育者の専門性向上に資することを目的に、保育者が抱く身体表現の指導・援助に関する悩みを明らかにし、その悩みが保育経験年数を重ねることによってどのように変化するかについて検討を行った。207 名の保育者から回答を得た質問紙調査の結果、「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」と「年齢に応じた指導の仕方」において、新任保育者の悩みの程度が有意に高く、一方「不得意な子どもにどう対応するか」や「表現することを恥ずかしがる子どもにどう対応するか」といった、表現することに何らかの課題がある（ように感じられる）子どもに対する指導・援助に関する悩みには、経験年数による差は認められなかった。以上より、保育経験の段階に応じた研修や支援の必要性が示唆された。

キーワード： 保育者、専門的成長、保育経験年数、身体表現、指導・援助に関する悩み

I. 問題と目的

近年、「保育の質」「保育者の専門性」について活発に議論されている。秋田（2013）¹⁾は、保育に関わる制度的な改革が進んでいる今、子どもと保護者、保育者の皆が育ち合うために改めて「保育の質」「保育者の専門性」について議論する必要性を指摘している。また小川（2011）²⁾は、家族や地域社会の変化を背景に、「保育」の専門性の確立が現代社会にとって急務であると述べている。

保育者（幼稚園教諭と保育所保育士）の資質向上に関して、保育所保育指針³⁾の第七章「職員の資質向上」には職員の資質向上に関する基本的事項として、「保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと」が謳われている。また、多様化する保育者の専門性について、幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために」（2002）⁴⁾には、幼稚園教員に求められる専門性として大きく 8 つの内容があげられている。それらは、「幼児理解・総合的に指導する力」「具体的に保育を構想する力、実践力」「得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性」「特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力」「小学校や保育所との連携を推進する力」「保護者及び地域社会との関係を構築する力」「園長など管理職が発揮するリーダーシップ」「人権に対する理解」であり、非常に幅広いものとなっている。

保育者の専門性に関する研究においては、保育経験年数を重ねることによってどのような変化・発達が果たされるのかという点について、一定の知見の蓄積が見られる。高濱（2000）⁵⁾は、保育者は経験年数を重ね熟達するにつれて豊富な構造化された知識をもつようになり、保育上の問題解決には文脈と結びついた手がかりやコツを使うようになることを明らかにしている。また小原ら（2008）⁶⁾は、子ども同士のトラブル場面に焦点化し、保育経験が11年以上の保育者は、それより経験の浅い保育者に比べてトラブルに対処するときに多様なかわりの選択肢を用い、よりトラブルを通して子ども同士の人間関係を拡大させる傾向があることを明らかにしている。これらのような専門的力量的の向上に関する研究以外にも、新任保育者は職務上の困難感について、中堅・ベテラン保育者に比べて「クラス経営が難しい」「子どもの怪我等への対応が不安」「子どもへの一斉指導が難しい」「自分の力不足を感じる」など、保育技術の未熟さや専門的な知識の不足からくる困難感を強く感じていること（加藤ら、2013）⁷⁾、新人保育士は、中堅・ベテラン保育士より心の健康度が低いこと（上村、2012）⁸⁾など、専門的力量的の向上に影響を及ぼすと考えられる要因についても明らかにされている。

そこで本研究でも、保育者の専門性について保育経験年数という視点から検討を行う。検討する内容としては、保育者が抱く指導・援助に関する悩みに注目したい。谷川（2013）⁹⁾は、新任保育者において、リアリティ・ショック（一方における自分の期待・夢と、他方における組織での仕事や組織に所属するという現実の間のギャップに衝撃を受けること）という危機が省察の契機となり、その省察を通して専門的成長が果たされるプロセスを示している。また足立ら（2009）¹⁰⁾は、保育者としてのアイデンティティの形成における危機（ある個人の、保育者として成長していく上での「重大な転換点に繋がる迷い・疑問」）体験の意義について論じている。これらの研究からは、保育者の成長過程において、危機体験などを通して悩み、考えることの重要性が示唆される。これは、危機体験といった大きな出来事でなくとも、日々の保育を通して悩み、考えることが保育者の専門的成長に寄与するということに置き換えることもできるのではないだろうか。すなわち、「日々の保育→指導・援助に関する悩み→省察（→研鑽）→専門的成長」というプロセスが想定され、保育者の指導・援助に関する悩みを明らかにすることには大きな価値があると考えられる。また、指導・援助に関する悩みの内容やその程度を明らかにすることで、その悩みを軽減するための具体的支援内容の検討につながり、保育者養成教育や現職者研修などに反映させることもできると考えられる。

これまでも保育者の指導・援助に関する悩みと類似した概念で検討された研究は散見される。保育士がとらえた苦労について明らかにした研究（小野寺、2005）¹¹⁾や保育者の職務上の困難感について明らかにした研究（加藤ら、2013）⁷⁾などがあげられるが、どちらも保育全般についての苦労・困難感であり、特定の保育内容に焦点化して保育者の指導・援助に関する悩みについて検討した研究はあまり見受けられない。そこで本研究では、特定の保育内容に焦点化して保育者の指導・援助に関する悩みについて検討することとし、特定の保育内容として身体表現を取り上げる。身体表現について古市（2007）¹²⁾は、定型的な枠ではとらえにくい分野であり、いくつかの困難さをもつ領域であると指摘し、それは、①幼児の一回性からくるデータ収集の困難さ、②個の発達と集団の影響が同時進行で起きること、③表現された動きの評価

について基準が曖昧であることの 3 つを主な理由とし、研究の蓄積も十分でないとしている。また、保育者が身体表現に苦手意識を抱いていることが指摘されている（鈴木、2013；高原ら、2012）^{13) 14)}。これらより、保育者が身体表現の指導において多くの悩みを抱いており、その悩みの軽減策を求めていることが想定され、身体表現の専門性に関する研究を行うことは現場保育者のニーズと合致していると考えられる。

以上より、本研究では保育者の専門性向上に資することを目的に、身体表現の指導・援助に関する悩みを明らかにし、その悩みが保育経験年数を重ねることによってどのように変化するのかについて検討することとする。

Ⅱ. 方法

A. データ収集の手続きと調査対象者

調査は、愛知県・大阪府・福岡県の、公立幼稚園・保育園(所)及び私立幼稚園・保育園(所)各 50 園（合計 600 園）を無作為に抽出し、勤務する保育者を対象に質問紙法により実施した。2010 年 10 月～12 月に、各園(所)に郵送にて質問紙の配布・回収を行った。倫理的配慮として、研究目的、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、無記名であり回答者は特定されないこと、調査票の提出をもって上記内容に同意したものとすることを調査依頼書に明記した。

B. 調査内容

（1）属性項目

勤務園の種別・公立私立の別・地域、回答者の性別・年齢・保育経験年数について回答を求めた。

（2）身体表現の指導・援助に関する悩み

保育現場における身体表現の指導・援助に関する悩みについて質問項目を作成した。作成にあたっては、私立幼稚園 1 園、私立保育園 1 園の保育者 22 名を対象に、「身体表現の指導・援助に関する悩み・困りごと」を自由記述形式にて調査し、回答結果をもとに 10 項目を精選した。「次の各項目について、あなたが身体表現の指導において悩んでいる程度をお答えください」という教示文に基づき、「とても悩んでいる」から「あまり悩んでいない」までの 6 件法（6 点～1 点）で回答を求めた。合わせて、10 の質問項目以外に悩んでいる内容があれば自由記述での回答を求めた。なお本研究では量的調査による悩みの程度の結果について論じる。

Ⅲ. 結果と考察

以下の分析には IBM SPSS Statistics 19 を使用した。

調査票の回収は 207 票（回収率 34.8%）であった。

A. 回答者の属性

回答者の勤務園について、種別は、幼稚園 107 名（51.7%）、保育園(所)98 名（47.3%）、その他（認定こども園）2 名（1.0%）、公私の別は、公立園 91 名（44.0%）、私立園 116 名（56.0%）、

表 1 回答者の属性 (N=207)

		人	%
勤務先			
・ 種別	幼稚園	107	51.7
	保育園（所）	98	47.3
	その他（認定こども園）	2	1.0
・ 公私の別	公立園	91	44.0
	私立園	116	56.0
・ 地域	愛知県	95	45.9
	大阪府	58	28.0
	福岡県	54	26.1
回答者			
・ 性別	女性	196	94.7
	男性	10	4.8
	無回答	1	0.5
・ 年齢	20 歳代	49	23.7
	30 歳代	44	21.3
	40 歳代	50	24.2
	50 歳以上	63	30.4
	無回答	1	0.5
・ 保育経験年数	5 年未満	32	15.5
	5 年以上 10 年未満	26	12.6
	10 年以上 20 年未満	53	25.6
	20 年以上 30 年未満	48	23.2
	30 年以上	45	21.7
	無回答	3	1.4
平均保育経験年数		18.3 年	

地域は、愛知県 95 名（45.9%）、大阪府 58 名（28.0%）、福岡県 54 名（26.1%）であった。また回答者について、性別は、女性 196 名（94.7%）、男性 10 名（4.8%）、無回答 1 名（0.5%）、年齢は、20 歳代 49 名（23.7%）、30 歳代 44 名（21.3%）、40 歳代 50 名（24.2%）、50 歳以上 63 名（30.4%）、無回答 1 名（0.5%）、保育経験年数は、5 年未満 32 名（15.5%）、5 年以上 10 年未満 26 名（12.6%）、10 年以上 20 年未満 53 名（25.6%）、20 年以上 30 年未満 48 名（23.2%）、30 年以上 45 名（21.7%）、無回答 3 名（1.4%）、平均保育経験年数は 18.3 年であった（表 1 参照）。

B. 身体表現の指導・援助に関する悩みの程度

10 項目について、平均値および標準偏差を示したものが表 2 である（6 点満点）。上位の項目ほど保育者が悩んでいる内容である。

「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」や「子どもの考えに沿いながらどのように表現を引き出すか」で悩みの程度が高かった。幼稚園教育要領¹⁵⁾の領域「表現」の内容の取扱い（2）において、「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする態度を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」とされ、幼児のあるがままの表現を受容することの大切さが示されている。その一方で鯨岡（1998）¹⁶⁾が述べるように、幼稚園や保育所では、眼前の子どもの「ある」を認めつつ、こうなってほしいと思う「なる」を示して援助していくことが求められる。身体表現の指導においても、子どもの素朴な表現を認めつつ、より豊かな表現につながるように言葉掛けなどの援助が必要となる。身体表現の指導において、「ある」を認めつつ、「なる」を示して援助することの難しさを保育者が感じており、そのことが「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」や「子どもの考えに沿いながらどのように表現を引き出すか」の悩みの程度の高さとなって表れたものと考えられる。また、鈴木（2013）¹⁷⁾は、「平成元年以降、環境を通じた保育の重要性、子どもの表現の総合性が唱えられ、子どもの日常生活の有り様こそが身体表現なのだから、格別に教える必要はなく、その姿を保育者が読み取り認めることこそが最優先という考えが一人歩きした」とし、「保育者は、子どもに何を望み、何をしたらよいのかという悩みにぶつかり身をすくませた。それでも何かをと感じる保育者が、身体表現「遊び」と称することで、“指導”ではないことを無理に強調した。皆が迷い苦しんだ。近年、“揺り戻し”の気配は見られるが、その出口は、今も見えそうで見えない」と述べている。この身体表現の指導の混乱が現在の保育現場にもあり、子どもの表現力を高めるための言葉掛けがそもそも必要なかどうか、あるいは子どもの表現を引き出すことをどの程度まで行うべきなのかといった考えが保育者間で共通ではなく、そのことが悩みの程度の高さにつながったとも考えられる。

一方で、「どのようにしたらできあがりがよくなるか」などはそれほど悩みの程度は高くなく、これは、上述したように、子どものあるがままの表現を受容することの大切さや、「日常生活からかけ離れたテーマや活動を提案して結果重視の作品づくりや共同の活動などをしないこと」を再確認することの必要性（平田、2009）¹⁸⁾を保育者が意識し、表現のできあがりのよしあしをそれほど重視していないことが影響したものと考えられる。

C. 保育経験年数による悩みの程度の比較

保育者が経験年数を重ねることによって身体表現の指導・援助に関する悩みの程度がどのように変化するかを検討した。経験年数の分類については、上村（2012）⁸⁾を参考に、5 年未満を「新任保育者」、5 年以上 20 年未満を「中堅保育者」、20 年以上を「ベテラン保育者」とし、さらに 20 年以上のベテラン保育者で全体の約半数を占めていたことから、20 年以上 30 年未満を「ベテラン保育者（前期）」、30 年以上を「ベテラン保育者（後期）」と分類した。そ

表2 身体表現の指導・援助に関する悩み
平均値、標準偏差（平均値降順）

項目	平均値	標準偏差
子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか	3.96	1.332
子どもの考えに沿いながらどのように表現を引き出すか	3.78	1.380
活動内容がワンパターンになりがち	3.65	1.373
不得意な子どもにどう対応するか	3.60	1.359
表現することを恥ずかしがる子どもにどう対応するか	3.50	1.361
年齢に応じた指導の仕方	3.45	1.370
個人差の大きい表現をどのように援助するか	3.27	1.231
キャラクターもののばかりで表現する子どもにどう対応するか	3.10	1.355
どのようにしたらできあがりがよくなるか	2.87	1.381
控えめではあるが表現している子どもにどう配慮するか	2.84	1.195

してこの4群間で身体表現の指導・援助に関する悩みの程度に差があるかを一元配置分散分析、Tukey法による多重比較で検討した。その結果が表3である。

「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」と「年齢に応じた指導の仕方」において有意差が認められ、「活動内容がワンパターンになりがち」において有意傾向が認められた。多重比較の結果、新任保育者が中堅・ベテラン保育者より「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」に悩んでおり、また新任保育者がベテラン保育者（前期）より「年齢に応じた指導の仕方」で悩んでおり、さらに中堅保育者がベテラン保育者（前期）より「年齢に応じた指導の仕方」で悩んでいる傾向にあることが示された。

有意差および有意傾向の認められた指導・援助内容では、総じて新任保育者の悩みの程度が高かった。藪中ら（2013）¹⁹⁾は、保育経験年数1年未満の初心者は、経験年数5年以上の保育者と比べて、自分自身の言語・身体表現技術に対する評価が低いことを明らかにしており、本研究の新任保育者においては評価の低さ（自分自身のいたらなさ）が悩みの高さにつながったものと考えられる。「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」は、上記したように、全体で最も悩みの程度が高かった項目であり、身体表現の指導において、「ある」を認めつつ、「なる」を示して援助することは、特に新任保育者にとって非常に難しく悩ましい内容であることが示された。また、「年齢に応じた指導の仕方」や「活動内容がワンパターンになりがち」は、主に教材研究の問題と考えられる。新任保育者は子どもの発達に関する知識が乏しく、その発達に応じた教材の活用法や指導の仕方のレパートリーも少ない。そのことが新任保育者の悩みの程度の高さにつながっており、経験年数を重ね、子どもの発達に関する知識を身につけ教材研究を進めていくことで、次第に悩みも低減されていくのであろう。

表3 保育経験年数による悩みの程度の比較(一元配置分散分析、多重比較)
(平均値、括弧内は標準偏差、F値)

	保育経験年数				F値	Tukey HSD法による 多重比較
	新任 N=32	中堅 N=79	ベテラン (前期) N=48	ベテラン (後期) N=45		
子どもの表現力を高めるために どのように言葉掛けをするか	4.68 (0.98)	3.94 (1.24)	3.65 (1.48)	3.87 (1.39)	4.15**	新任>中堅、ベテラン(後期)* 新任>ベテラン(前期)**
子どもの考えに沿いながら どのように表現を引き出すか	4.29 (1.44)	3.67 (1.28)	3.60 (1.47)	3.84 (1.38)	1.91	
活動内容がワンパターンになりがち	4.00 (1.37)	3.82 (1.31)	3.38 (1.33)	3.41 (1.48)	2.22†	
不得意な子どもにどう対応するか	3.97 (1.20)	3.66 (1.29)	3.42 (1.50)	3.51 (1.33)	1.18	
表現することを恥ずかしがる 子どもにどう対応するか	3.65 (1.50)	3.59 (1.29)	3.52 (1.44)	3.31 (1.24)	0.53	
年齢に応じた指導の仕方	4.00 (1.29)	3.52 (1.23)	2.92 (1.40)	3.49 (1.49)	4.37**	新任>ベテラン(前期)** 中堅>ベテラン(前期)†
個人差の大きい表現を どのように援助するか	3.45 (1.15)	3.39 (1.26)	2.91 (1.20)	3.37 (1.18)	1.92	
キャラクターものばかりで 表現する子どもにどう対応するか	2.90 (1.38)	3.06 (1.24)	3.02 (1.44)	3.40 (1.47)	0.97	
どのようにしたら できあがりになるか	3.29 (1.51)	2.84 (1.37)	2.79 (1.32)	2.78 (1.31)	1.11	
控えめではあるが表現している 子どもにどう配慮するか	3.00 (1.27)	2.77 (1.20)	2.73 (1.22)	2.96 (1.09)	0.56	

†p<.10、*p<.05、**p<.01

一方で、保育経験年数によって悩みの程度に差がない項目もあり、「不得意な子どもにどう対応するか」や「表現することを恥ずかしがる子どもにどう対応するか」、「控えめではあるが表現している子どもにどう配慮するか」といった保育者側からすると表現することに何らかの課題がある(ように感じられる)子どもに対する指導・援助に関しては、経験年数による差はなく、新任保育者も中堅、ベテラン保育者も同程度に悩んでいることが明らかとなった。小野寺(2005)¹¹⁾は、保育士が子ども1人1人の個性を把握するのに苦労している程度は、経験年数によって差がないことを示しており、本研究でも身体表現することが得意でなかったり、恥ずかしがりだったり控えめであったりといった子どもの個性に関連した指導・援助に関する悩みは、経験年数に関係なく保育者に共通した悩みであり、新任保育者に限らず、中堅、ベテラン保育者にも悩みを低減させる支援が必要であることが示唆される。

上記したように、悩みの内容によって経験年数を重ねることで悩みが低減する場合とそうでない場合があり、新任→中堅→ベテラン(前期)→ベテラン(後期)へと直線的に悩みが低減するわけではないことが明らかとなった。経験年数と悩みの変化のプロセスについて詳細に示すため、経験年数によって悩みの程度に有意差が認められた2項目(「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」「年齢に応じた指導の仕方」)、および有意差は認められなかったものの特徴的な変化のプロセスを示した2項目(「表現することを恥ずかしがる子どもにどう対応するか」「キャラクターものばかりで表現する子どもにどう対応するか」)について、経験年数による悩みの程度の変化について図示した(図1~4)。

まず有意差の認められた「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」(図

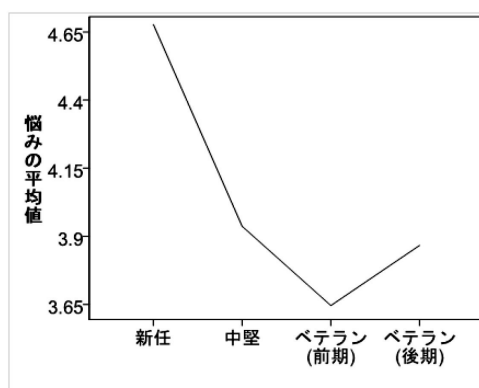


図1 「子どもの表現力を高めるために
どのように言葉掛けをするか」の変化

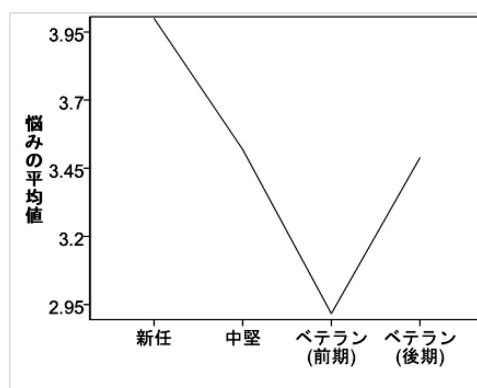


図2 「年齢に応じた指導の仕方」の変化

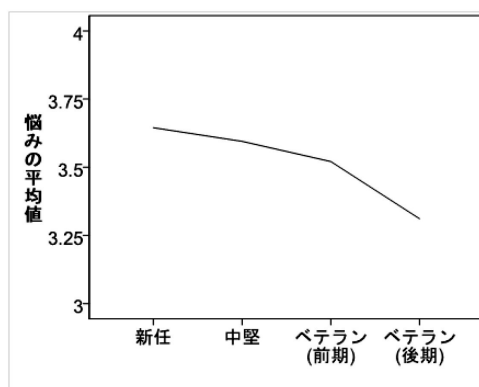


図3 「表現することを恥ずかしがる子どもに
どう対応するか」の変化

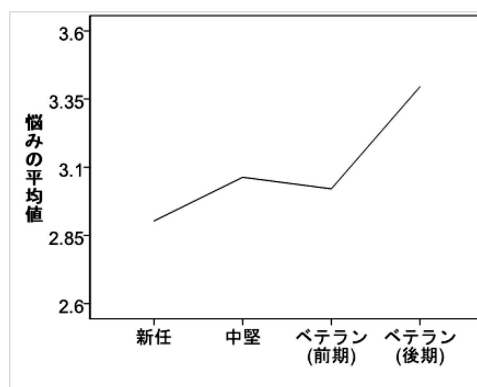


図4 「キャラクターものばかりで表現する
子どもにどう対応するか」の変化

1)、「年齢に応じた指導の仕方」(図2)では、新任保育者からベテラン保育者(前期)まで悩みは低減するものの、ベテラン保育者(後期)で上昇に転じている。ベテラン保育者(前期)とベテラン保育者(後期)とに有意差はないものの、この結果は興味深い。ベテラン保育者(後期)は保育経験年数30年以上の保育者であり、管理職に就いている保育者も一定数含まれると考えられる。管理職という立場で子どもとのかかわりや他の保育者とのかかわりを通して、それまでとは違った視点で保育を見、子どもに対する言葉掛けや年齢に応じた指導法について再考するきっかけがあるのかもしれない。これまで保育経験年数を軸に保育者の変化・発達について検討した研究では、概ね20年以上の経験者をベテラン保育者として一括りにし、分析を行っている。しかし、20年以上のベテラン保育者のなかでも変化・発達のある可能性が本研究から示唆されたことから、今後ベテラン保育者内や管理職かどうかを含めて検討する必要性があると言える。

続いて、有意差は認められなかったものとして「表現することを恥ずかしがる子どもにどう

対応するか」(図3)を見てみると、上記したように新任保育者からベテラン保育者(後期)までゆるやかに悩みは低減しているものの、どの段階でもほぼ同程度の悩みである。表現することに何らかの課題がある(ように感じられる)子どもに対する指導・援助に関しては、経験年数による悩みの差はないのである。しかしその一方で、「キャラクターものばかりで表現する子どもにどう対応するか」(図4)では、有意差はないものの、新任保育者からベテラン保育者(後期)へ悩みが上昇しており、最も保育経験年数の長いベテラン保育者(後期)の悩みが高くなっている。これは、今の子どもが好んでいるキャラクターに関する知識は若い世代の保育者ほど豊富であると考えられ、子どもがキャラクターもので表現することにあまり抵抗はないが、経験年数を重ね世代が上がるにつれて、子どもが表現するキャラクターを理解できなかったり、抵抗を感じたりするのかもしれない。キャラクターもので表現することの是非はひとまずおいておき、経験年数を重ねることで悩みが高まる可能性が示されたことは興味深い。

以上のように、身体表現の指導・援助に関する悩みは、その悩みの内容によって保育経験年数との関連の仕方が異なることが示された。足立ら(2010)²⁰⁾は、保育者には保育経験の各段階において、その成長に応じた様々な問題や落ち込み(揺らぎ)があることを明らかにしている。身体表現の指導・援助に関する悩みについても、保育経験の段階ごとに悩む内容に違いがある可能性が示唆された。

IV. まとめと今後の課題

本研究では保育者の専門性向上に資することを目的に、身体表現の指導・援助に関する悩みを明らかにし、その悩みが保育経験年数を重ねることでどのように変化するのかについて検討を行った。その結果、「子どもの表現力を高めるためにどのように言葉掛けをするか」と「年齢に応じた指導の仕方」において、新任保育者の悩みの程度が高く、養成教育や初任者研修などで身体表現の教材研究などを積極的に行う必要性が示唆された。一方「不得意な子どもにどう対応するか」や「表現することを恥ずかしがる子どもにどう対応するか」といった、表現することに何らかの課題がある(ように感じられる)子どもに対する指導・援助に関する悩みは、経験年数による差はなく、新任保育者も中堅、ベテラン保育者も同程度に悩んでいることが明らかとなった。これより、新任からベテランまで含めて、表現することに課題がある(ように感じられる)子どもに対する指導・援助に関して、研修や何らかの支援が必要であることが示唆された。野口(2013)²¹⁾は、保育者の専門的発達にメンタリング(新人に対する先輩保育者の指導や援助)が大きな役割を果たすことを指摘しており、また足立ら(2010)²⁰⁾は、保育者にはその成長に応じた様々な問題や落ち込み(揺らぎ)があり、その解決のためには相談できる重要な他者の存在など保育者を取り巻く職場環境が大きく関与していると述べている。本研究で明らかとなった身体表現の指導・援助に関する悩みも、共に悩み、共によりよい保育を追い求めていく保育者間の関係があつてこそ、専門的成長につながる要因となりうる。「リアリティ・ショックという危機→省察→専門的成長」というプロセスを経るためには、一定の期間と機会が必要であることも指摘されており(谷川、2013)⁹⁾、人的にも時間的にも整備された職場環境の構築が望まれる。

最後に今後の課題について述べる。鈴木（2013）¹³⁾は、身体表現における保育者の資質能力として、「保育教材を展開する力：生活に必然性のある身体表現活動を展開するための技能」と「保育者の資源：子どもたちの身体表現を豊かにする身体的な感性」の2つをあげている。本研究で設定した10項目の悩みの内容は、主に前者の資質能力に関するものであった。保育者自身の感性・表現力に関する悩みについても検討する必要がある。また、本研究では日常の保育における指導に関する悩みが省察のきっかけとなり、それが専門的成長につながるという仮説を設定し、身体表現という保育内容に焦点化して議論を展開した。今後は指導に関する悩みが本当に専門的成長につながっているのかを保育者の成長プロセスを質的に検討することから明らかにしたい。

引用文献

- 1) 秋田喜代美, 2013, 「総論 保育者の専門性の探求」, 発達, 134, pp. 14-21, ミネルヴァ書房
- 2) 小川博久, 2011, 「『保育』の専門性」, 保育学研究, 49(1), pp. 100-110
- 3) 厚生労働省, 2008, 『保育所保育指針解説書』, フレーベル館
- 4) 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書, 2002, 「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm (2014/3/25/access)
- 5) 高濱裕子, 2000, 「保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応」, 発達心理学研究, 11(3), pp. 200-211
- 6) 小原敏郎・入江礼子・白石敏行・友定啓子, 2008, 「子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか－保育者の経験年数・トラブルが生じる状況による分析を中心に－」, 乳幼児教育学研究, 17, pp. 93-103
- 7) 加藤由美・安藤美華代, 2013, 「新任保育者の抱える職務上の困難感の要因に関する研究－新任保育者と中堅・ベテラン保育者および園長との比較－」, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 154, pp. 15-23
- 8) 上村眞生, 2012, 「保育士のメンタルヘルスに関する研究－保育士の経験年数に着目して－」, 保育学研究, 50(1), pp. 53-60
- 9) 谷川夏実, 2013, 「新任保育者の危機と専門的成長－省察のプロセスに着目して－」, 保育学研究, 51(1), pp. 105-116
- 10) 足立里美・柴崎正行, 2009, 「保育者アイデンティティの形成と危機体験の関連性の検討」, 乳幼児教育学研究, 18, pp. 89-100
- 11) 小野寺敦子, 2005, 「保育士がとらえた苦勞－経験年数と性格特性に焦点をあてて－」, 目白大学短期大学部研究紀要, 45, pp. 67-77
- 12) 古市久子, 2007, 「身体表現の発達に関する研究の現状と課題」, 児童心理学の進歩, 46, pp. 171-195, 金子書房
- 13) 鈴木裕子, 2013, 「保育者の資質能力としての身体表現の理解」, 保育学研究, 51(3), pp. 175-178
- 14) 高原和子・瀧信子・矢野咲子・下釜綾子, 2012, 「身体表現指導に関する一考察」, 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編, 13, pp. 71-77
- 15) 文部科学省, 2008, 『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館

- 16) 鯨岡峻, 1998, 『両義性の発達心理学』, ミネルヴァ書房
- 17) 前掲 13), p. 176
- 18) 平田智久, 2009, 「幼稚園教育要領の改訂のポイント 領域・表現」, 新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて, p. 73, ミネルヴァ書房
- 19) 藪中征代・寺田美子, 2013, 「経験年数の違いによる保育者の音楽表現」, 聖徳大学児童学研究紀要, 15, pp. 37-46
- 20) 足立里美・柴崎正行, 2010, 「保育者アイデンティティの形成過程における『揺らぎ』と再構築の構造についての検討ー担任保育者に焦点をあててー」, 保育学研究, 48(2), pp. 107-118
- 21) 野口隆子, 2013, 「保育者の専門性とライフコースー語りの中の“保育者としての私”」, 発達, 134, pp. 59-64, ミネルヴァ書房

付記

本研究は、日本保育学会第 64 回大会で発表したものに加筆・修正を加えたものである。

また、平成 22～24 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）『幼児の身体表現力を豊かに育てる教育方法の提案』（課題番号：22500554、研究代表者：古市久子）による研究の一部である。

